

居住空間における空間経験と規模感覚との関連性に関する研究

——女子学生寮の入寮期における「広さ感」、「ゆったり感」と居住経験の
関連性について——

谷 口 久美子

A Study on Sense of Space Volume in relation to Experience

——Evaluation of Volume and Spaciousness for interior Space——

Kumiko Taniguchi

要 旨 居住空間における規模感覚は、「空間経験の蓄積による尺度の変化」と「感覚量を基準とした空間量の調整」を繰り返しながら次第に形成されていくと考えられる。そこで、本研究では、実際の居住空間における空間経験と規模感覚との関連性について明らかにすることを目的とした。本報では、女子学生寮の入寮期における個室の「広さ感」、「ゆったり感」と空間経験に関するアンケート調査結果について考察した。

その結果、以下のような知見を得た。①居住空間の「広さ感」、「ゆったり感」は、以前に経験した居住空間を基準とした相対的な尺度で評価される傾向がある。②作業スペースの確保は「ゆったり感」へのプラス要因として働く。また、「居住空間の『広さ感』や作業スペースを得ることを目的として家具配置の変更が行われた結果、空間の評価が高くなる」という「感覚量を基準とした空間量の調整」と「空間経験の蓄積による尺度の変化」の相互関係がみられ、居住空間において空間規模感覚が形成される過程の一端も示された。

1 はじめに

1-1 研究の背景

当初は広いと感じた空間も時間が経過すると狭く感じる場合があり、当初は窮屈と感じた空間でも次第に窮屈と感じなくなる場合がある様に、空間の広さや大きさに対する感じ方には、時間的経過に伴う変化がみられる。一方、集合住宅の居住事例調査においては、LDの座家具量を減じることにより、空間の「広さ」感を確保するという家具量の調整行動がみられる¹⁾。

これらの現象から、実際の居住空間における規模感覚は、「空間経験の蓄積による尺度の変

化」と「感覚量を基準とした空間量の調整」を繰り返しながら次第に形成されていくと考えられる。これは、近年の人間—環境関係研究におけるトランザクショナルリズムの概念²⁾とも相容れる考え方といえよう。

近年は、居住空間の規模計画に関する研究が成果をあげているが、これらの研究は実験空間における第一印象の評価を中心に進められてきたものであるため、前述のような見地からは、これらの成果を実際の生活空間にあてはめて考えることが困難である。

そこで本研究では、実際の居住空間において規模感覚が形成される過程に注目し、空間経験と規模感覚との関係について考察する。

1-2 研究の目的と方法

本研究では、居住空間における空間経験と規

* 本学講師 住居計画

模感覚との関連性について明らかにすることを目的とする。居室の規模感覚を測る尺度として、部屋の広さについては「広い—狭い」、家具を配置した状態でのヴォリューム感については「ゆったり—窮屈」の形容詞対を用い、それぞれ「広さ感」、「ゆったり感」とした。

また、調査対象は、同規模の居住空間において実際に居住している状態での規模感覚の差異を知るために、女子学生寮の個室とした。

本報では主に、女子学生寮の入寮期における個室の「広さ感」、「ゆったり感」と過去の居住経験との関係について考察する。

2 調査概要と調査対象者の基本属性

2-1 調査の概要

調査対象学生寮において、①個室および共有部分の「広さ感」「ゆったり感」、②日常生活の状況、③寮個室の家具配置や共有室の使用状況、④過去の居住経験や実家の居住空間についてのアンケート調査を行った。特に、寮個室と実家の私室空間については、家具シールを用いて簡単な家具配置調査を行った。

表1に調査の概要を示す。アンケート調査の対象者は、小平市にある文化女子大学学生寮の

寮生178名である。調査を行った学生寮は、1997年3月に新築されたもので、寮室は全室洋室の個室である。表2に学生寮の概要を、図1に学生寮の個室(タイプ1)平面図を示す。最も多い個室「タイプ1」は、面積が16.8m²(約10畳)であり、キッチン、バスと通路部分を除いた居室部分の面積は8.46m²(約5.5畳)である。居室部分の天井高は2,570mmであり、パーソナルスペースの概念からみて天井面からの圧迫感を受けないために必要な天井の高さ(2,400mm)を満たしている³⁾。

2-2 調査対象者の基本属性

調査結果の分析にあたり、アンケート調査に回答した162名のうち、個室規模の異なるタイプ2、3の入寮者と留学生を除く154名を分析対象とした。表3に調査対象者の基本属性を示す。2年次以上の学生は50名で、全員がこの学生寮の新築に伴って閉鎖された渋谷区西原の学生寮から転入している。1年次104名のうち、入寮前は「自宅」に住んでいた者が103名、残り1名は兄弟や友人との「共同生活」をしていた者である。実家の所在地は、東北、中部地方が多く、実家の住戸形式は95%が一戸建である。

表1 調査概要

調査期間	配布数	回収数	回収率
1997年9月～10月	178	162	91.0%

表2 調査対象学生寮の概要

建築年月	1997年3月
構造	壁式RC造
規模	地上4階
延床面積	6,308㎡
用途	2～4階：学生寮 1階：講義室
個室数	タイプ1：180 タイプ3：5 タイプ2(ゲストルーム)：1
共有室	実習室：3(各階) 図書室：1(2階) 談話コーナー：2(3,4階) ラウンジ：1(2階)

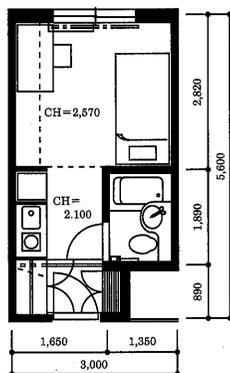


図1 寮個室平面図(タイプ1)

表3 調査対象者の基本属性

基本属性		(人)	(%)
学部	家政学部	91	59.1%
	文学部	63	40.9%
学年	1年	104	67.5%
	2年	43	27.9%
	3年	2	1.3%
	4年	5	3.3%
入寮前の住居	自宅	103	66.9%
	西原寮	50	32.5%
	その他	1	0.6%
実家の所在地	北海道	9	5.9%
	東北・北陸	49	31.8%
	関東・東海	16	10.4%
	中部・近畿	50	32.5%
	中国・四国	15	9.7%
	九州・沖縄	15	9.7%
実家の住戸形式	一戸建て	148	96.1%
	集合住宅	2	1.3%
	その他	4	2.6%

表4 寮個室の「広さ感」と「ゆったり感」

上段：実数 下段：全%	全体	寮個室の「ゆったり感」					
		かゆ な たり	やゆ つ た り	普 通	やや 窮 屈	か窮 な り 屈	
全体	154 100.0%	4 2.6%	7 4.5%	43 27.9%	79 51.3%	21 13.6%	
寮個室の「広さ感」	かなり広い	4 2.6%	3 1.9%	1 0.6%	0	0	0
	やや広い	9 5.8%	0	0	4 2.6%	5 3.2%	0
	普通	56 36.4%	1 0.6%	6 3.9%	29 18.8%	19 12.3%	1 0.6%
	やや狭い	71 46.1%	0	0	10 6.5%	48 31.2%	13 8.4%
	かなり狭い	14 9.1%	0	0	0	7 4.5%	7 4.5%

3 入寮以前の居住経験と個室の規模感覚

3-1 寮個室の「広さ感」, 「ゆったり感」

表4は、寮個室の「広さ感」と「ゆったり感」を示したものである。「広さ感」では「やや狭い」、「ゆったり感」では「やや窮屈」と感じている者が最も多くみられるが、部屋の「広さ感」では「やや狭い」の評価46.1%に対し、家具を配置した状態での「ゆったり感」では「やや窮屈」の評価は51.3%と半数を超えており、全体に「広さ感」に比べ「ゆったり感」の方が評価が厳しい傾向がみられる。

「広さ感」と「ゆったり感」において評価に相違が生じる要因としては、個室内の家具量や明るさ、寮生の身長などが考えられる。今回の調査では、これらの要因の他にも、在室時間などとの関連性がみられたが、主な要因は明らかとならなかった。

3-2 入寮以前の居住経験と寮個室の「広さ感」, 「ゆったり感」

図2は、入寮以前の住居と個室の「広さ感」との関係を示したものである。「自宅」から入寮した者よりも「西原寮」から入寮したの方が、「やや狭い」、「かなり狭い」と感じている者が少なく、「やや広い」、「かなり広い」と感じている者が多い。「自宅」から入寮した者は1年次であるため、実家の私室を基準として個室の「広さ感」を評価し、「西原寮」から入寮した者は、西原寮の寮室を基準としていることが考えられる。

図3は、実家の私室面積（畳数）と寮個室の「広さ感」との関係を示したものである。私室は調査対象者全員が保有しているが、2人以上で共有している者がいるため、分析対象は私室を1人使用している141名とした。実家の私室面積が、寮個室の居住部分と同程度の「6畳未満」では、「やや狭い」、「かなり狭い」と感じている者を合わせても半数以下に止まっているが、私室面積が大きいほど、寮個室を「やや狭い」と感じている者も「かなり狭い」と感じて

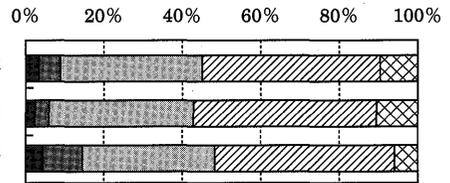


図2 入寮前の住居と寮個室の「広さ感」

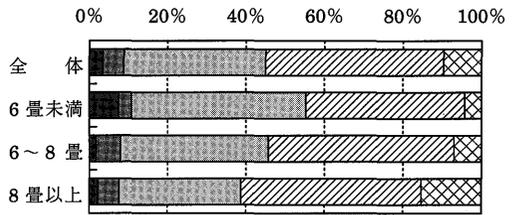


図3 実家の私室面積（畳数）と寮個室の「広さ感」

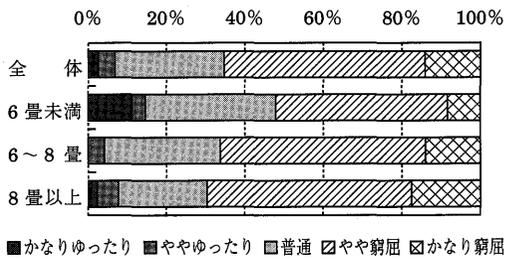


図4 実家の私室面積（畳数）と寮個室の「ゆったり感」

いる者も多くなり、寮個室の広さを実家の私室に対して相対的に評価する傾向がみられる。

図4は、実家の私室面積と寮個室の「ゆった

り感」の関係を示したものである。私室面積が大きいほど「やや窮屈」、「かなり窮屈」と感じている者が多く、「広さ感」と同様に実家の私室に対して相対的に評価していると考えられる。これらの点から、「自宅」から入寮した者は、実家の私室を基準として寮個室の「広さ感」、「ゆったり感」を捉えていると考えられる。

3-3 西原寮からの入寮者にみる小平寮個室の「広さ感」、「ゆったり感」

2年次以上の寮生50名は、西原寮からの転入である。図5に、西原寮の寮室平面図を示す。西原の寮室には、和室と洋室があり、和室は6畳に造り付け収納のついた2人部屋で、洋室は10畳大の3人部屋であるが、近年では洋室も2人で使用することが多かったようだ。表5は、西原寮から転入した50名が使用していた寮室の和洋室形式と使用人数を示したものであるが、洋室でも2人使用の者が80%となっている。

図6は、西原寮の和洋室形式と現在の寮個室の「広さ感」との関係を示したものである。大きな差異はみられないが、西原寮で「洋室」にいた者は「和室」にいた者に比べ、小平寮の個室を「やや狭い」、「かなり狭い」と感じている割合が高い。図7は西原寮の和洋室形式と現在の寮個室の「ゆったり感」との関係を示したものである。西原寮で「和室」にいた者は「かなり窮屈」と感じている者と「やや窮屈」と感じている者を合わせても半数であるが、「洋室」にいた者は、70%が「やや窮屈」あるいは「かなり窮屈」と感じており、「広さ感」よりも大きな差異がみられた。小平寮個室の「広さ感」、「ゆったり感」には、西原寮の寮室に対する感じ方が影響していると考えられる。図8は西原寮の和洋室形式と寮室の「広さ感」の関係、図9は「ゆったり感」との関係を示したものである。西原寮の「和室」は6畳を2人で使用し

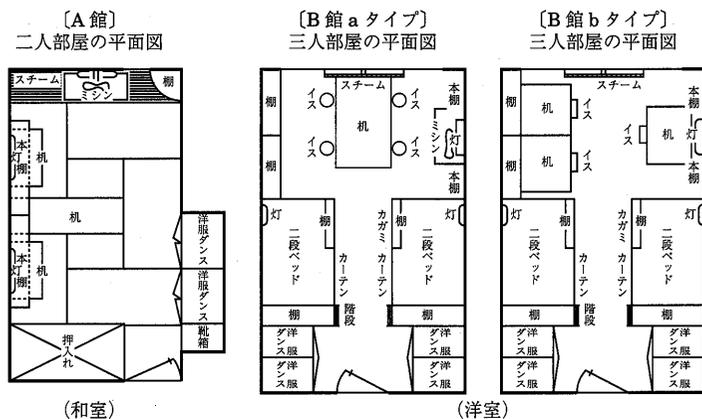


図5 西原寮の寮室平面図（和室、洋室）

表5 西原寮の寮室形式と使用人数

寮室形式	使用人数		
	1人	2人	3人
和室	1 5.0%	19 95.0%	—
洋室	2 6.7%	24 80.0%	4 13.3%
全体	3 6.0%	43 86.0%	4 8.0%

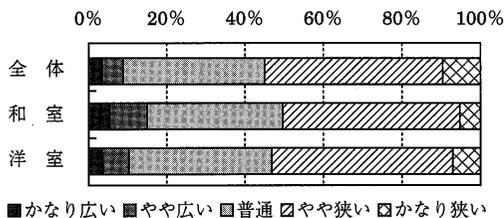


図6 西原寮の寮室形式と小平寮個室の「広さ感」

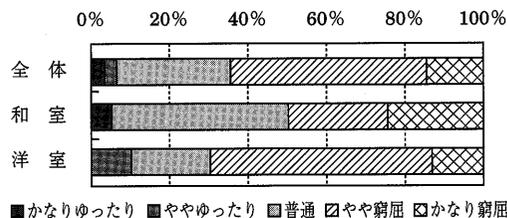


図7 西原寮の寮室形式と小平寮個室の「ゆったり感」

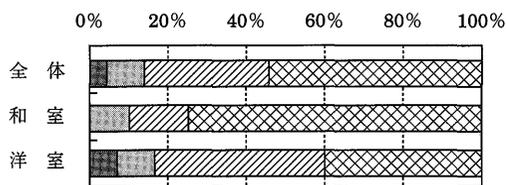
ているため、「広さ感」、「ゆったり感」ともに評価が低く、「広さ感」では「かなり狭い」と「やや狭い」を合わせると90%以上、「ゆったり感」では「かなり窮屈」と「やや窮屈」を合わせると95%になる。一方、「洋室」は本来3人部屋である10畳を2人で使用していたため、「広さ感」、「ゆったり感」とも、「和室」に比べれば評価が高く、特に「ゆったり感」では、「かなり窮屈」と「やや窮屈」を合わせても70%にとどまっている。「洋室」は1人あたりの床面積が大きいだけでなく、寮生の話では「2段ベ

ッドの空いている段を収納として利用していた」そうで、収納量の多さが「ゆったり感」へのプラス要因として働いているようだ。

4 空間への働きかけと規模感覚

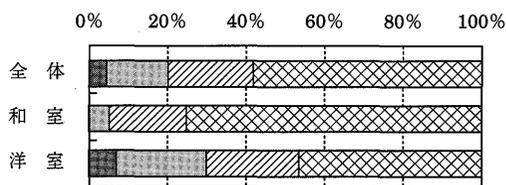
4-1 個室における家具配置の状況

小平寮個室にはあらかじめ造り付けの収納と机、収納付のベッドが備え付けられているが、全体の93.5%が、収納棚や衣装ケースを持ち込んでいる他、小テーブル（座卓）を保有してい



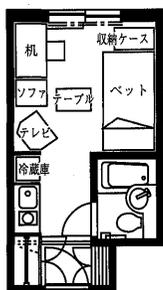
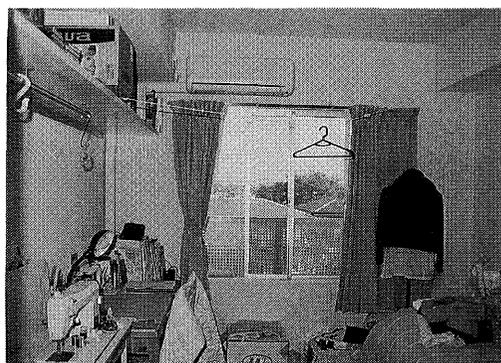
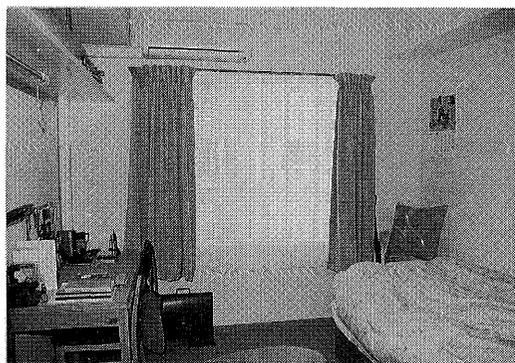
■かなり広い ■やや広い □普通 □やや狭い □かなり狭い

図8 西原寮の寮室形式と寮室の「広さ感」

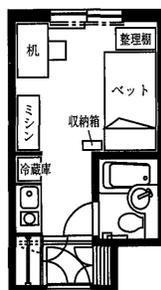
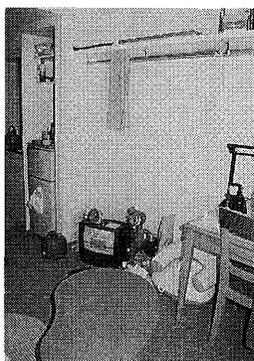


■かなりゆったり ■ややゆったり □普通 □やや窮屈 □かなり窮屈

図9 西原寮の寮室形式と寮室の「ゆったり感」



事例 (1)



事例 (2)

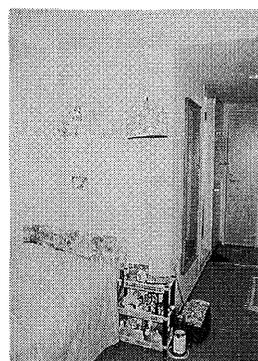


図10 寮個室の居住事例

る者も52.6%みられる。また、希望によりミシンが貸与され、22.1%が個室内に備え付けている。これらアンケート調査結果の補足として、寮個室の家具配置状況の確認と写真撮影および入寮時からの「広さ感」、「ゆったり感」の変化の有無などの簡単なヒアリングを行った。調査に応じた14名の内、家具配置を変更した4名については、その理由についてもヒアリングした。以下に示す4つの事例は、(1)家具配置を変更せず、収納1つと小テーブルを保有する平均的な事例、(2)家具配置を変更せず、ミシンを保有する事例、(3)家具配置を変更し、収納を増やした事例、(4)家具配置を変更し、ミシンを保有する事例である。

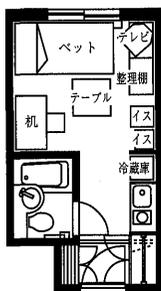
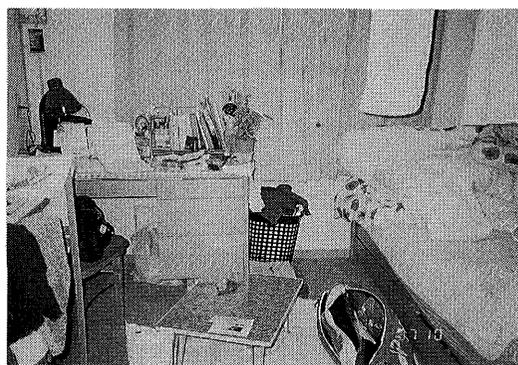
図10は、小平寮の個室における家具配置状態(図面)と住まい方(写真)を示したものである。事例(1)は、収納1つと小テーブルを保有する最も平均的な事例である。季節外の洋服などは実家に送っているため、物は少ない。テレビ

などのAV機器や炊飯器などの電化製品は、家具配置を確認した寮生の殆どが保有しているが、この事例のように床の上に直に置かれていることが多い。事例(2)は、服装学科の学生で、貸与されたミシンを置いている。テレビは保有していないが、「物が多く、家具配置を変更したくてもできない」そうで、段ボール箱などが窓下に置かれている。

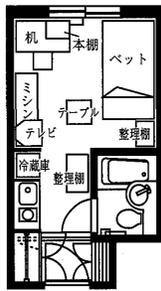
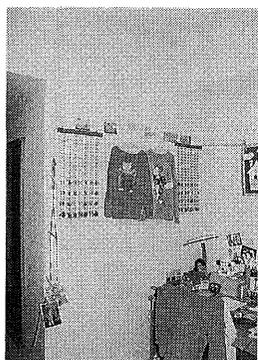
4-2 家具配置の変更と個室の「広さ感」、「ゆったり感」

図11は、家具配置を変更した事例である。事例(3)は、ベッドの窓際への移動に伴い机も移動した事例であるが、入口側にできたスペースには、寮内の友人が遊びに来た時のために小テーブルとイスが置かれている。事例(4)は、机の向きを変更した事例で、貸与されたミシンを置き、ミシン台の上にはテレビが置かれている。

備え付けの机とベッドは女子学生の力で動かすにはかなり重いため、入寮当初は多くの者が



事例 (3)



事例 (4)

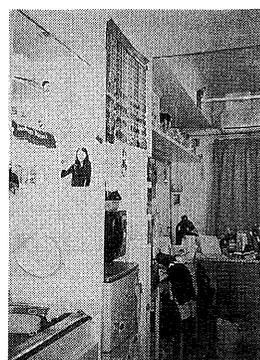


図11 寮個室の居住事例 (家具配置を変更したもの)

家具は造り付けとっていた様だ。また、家具が動くことに気がついても家具配置の変更は禁止されているとっていた者もある。家具配置を変更した者は、「寮内の友人が（家具を）移動したのをみて自分も変更した」り、「友人同士で協力して変更した」りしている。

家具配置変更の理由は「床を広くとりたかった」からで、床面が細長く残るよりも四角い方が広く感じるからだという。家具配置を変更した4つの事例における変更の理由は「実家でもベッドを窓際に置いていたから」の様な実家の私室における家具配置の習慣によるものが1例あったが、他は「配置を変えた方が広い感じになると思った」、「課題などの作業をするために床面を広くとりたかったから」の様に「広さ感」や作業スペースを求めたものであった。

アンケート調査では、個室に備え付けの机やベッドの配置を変更した者は全体の16.9%にあたる26名であった。図12は、家具配置の変更と個室の「広さ感」との関係を示したもので、図13は「ゆったり感」との関係を示したものである。家具配置の変更をした者はしないものに比べ、「やや広い」、「ややゆったり」の割合が高く、「やや狭い」や「やや窮屈」、「かなり窮屈」の割合が低い傾向がみられる。

ヒアリングによると、家具配置を変更した事例では、配置を変更する以前に比べ、個室の「広さ感」、「ゆったり感」が増したと感じている。その理由として、「床面が（細長く残っていたが）四角くとれるようになって作業がしやすい」など、まとまった作業スペースの確保を挙げる者がみられ、行為のためのスペースが確保されることが「広さ感」、「ゆったり感」のプラス要因として働いていると考えられる。

5 ま と め

学生寮の入寮期における個室の「広さ感」、「ゆったり感」と居住経験の関連性について考察した結果、以下のような知見を得た。

① 居住空間の「広さ感」、「ゆったり感」は、

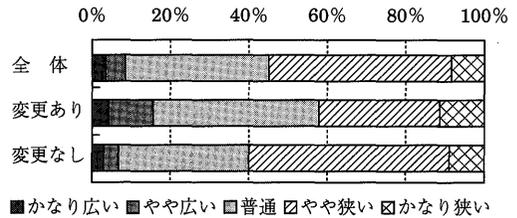


図12 家具配置の変更と個室の「広さ感」

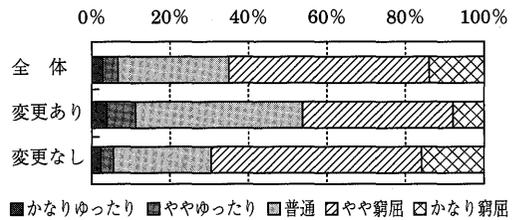


図13 家具配置の変更と個室の「ゆったり感」

以前に経験した居住空間を基準とした相対的な尺度で評価される傾向がある。

② 作業スペースの確保は「ゆったり感」へのプラス要因として働く。

また、「居住空間の『広さ感』や作業スペースを得ることを目的として家具配置の変更が行われた結果、空間の評価が高くなる」という「感覚量を基準とした空間量の調整」と「空間経験の蓄積による尺度の変化」の相互関係がみられ、居住空間において空間規模感覚が形成される過程の一端も示された。

今回の調査は、入寮後半年経過時点で行ったため、以前の居住経験と規模感覚との関係が中心となったが、今後も継続的に調査を行い、時間的な経過に伴う規模感覚の変化についても明らかにしたい。また、「広さ感」および「ゆったり感」における評価の相違の要因を明らかにすることも今後の課題としたい。

謝辞 本調査を行うにあたり小平国際学生会館館長池田先生ならびに多数の寮生の協力を得ました。また、本学小原誠教授にも貴重なご助言を戴きました。心より感謝します。また、この研究の一部は、本学卒論生高木順子さんの協力を得ています。

注

- 1) 文献(5), (6)
- 2) 「環境と人間とをそれぞれ独立のものとして両者間の相互作用を扱うのではなく、一つの行動のなかの働きとみる立場」(舟橋國男「環境行動デザイン研究と計画理論」による) 文献(1), pp. 34-55
- 3) 室空間が「ゆったりとしている」と評価されるためには、少なくとも3,000×3,000以上の床面が必要とされ、天井面から圧迫感を受けないためには、2,400以上の天井高が必要とされている。文献(7)

参考文献

- (1) 日本建築学会編：人間—環境系のデザイン，彰国社，1997年
- (2) 高橋鷹志，西出和彦ほか編著：シリーズ〈人間と建築〉1 環境と空間，朝倉書店，1997年
- (3) 橋本都子，込山教司，初見 学，高橋鷹志：室空間容積と印象評価に関する実験的研究—容積を指標とした空間計画のための基礎研究（その2）—，日本建築学会計画系論文集，第508号，pp. 99-104，1998年6月
- (4) 込山教司，橋本都子，初見 学，高橋鷹志：室空間容積と印象評価に関する実験的研究—容積を指標とした空間計画のための基礎研究（その1）—，日本建築学会計画系論文集，第496号，pp. 119-124，1997年6月
- (5) 谷口久美子，丸茂みゆき，沢田知子：室内空間の規模計画に関する一考察(1)集合住宅のLD空間における座家具の保有パターンと空間評価，日本インテリア学会大会研究発表梗概集8，pp. 10-11，1996年10月
- (6) 丸茂みゆき，谷口久美子，沢田知子：室内空間の規模計画に関する一考察(2)集合住宅のLD空間における座家具の保有パターンと空間評価，日本インテリア学会大会研究発表梗概集8，pp. 12-13，1996年10月
- (7) 橋本都子，西出和彦，高橋鷹志：個体空間からみた室空間の3次元的スケールについて—指示領域と空間の印象評価の実験に基づく考察—，日本建築学会大会学術講演梗概集，E-1 建築計画I，pp. 787-788，1998年9月